

雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅

— 阪神間のモダニズム住宅 その2 —

田 中 栄 治

キーワード：阪神間、モダニズム、住宅、『建築と社会』、建築家

1. はじめに

前稿^(*)において、雑誌『新建築』などに掲載された住宅を調べることにより、戦後の阪神間におけるモダニズム住宅の展開について考察を行った。

この稿では、雑誌『建築と社会』に掲載された記事を調べることにより、当時の関西における住宅設計を取り巻く状況についての考察を行う。今回は特に戦後の状況を理解する前提となる戦前の状況を見ていくことにする。なお、「阪神間」や「モダニズム住宅」という言葉については、前稿を参照いただきたい。

(*) 「雑誌『新建築』にみる戦後の阪神間の住宅」神戸山手大学 紀要 第7号 2005年12月

2. 雑誌『建築と社会』

大正初期、近畿在住の建築家有志約20名により「オキナ会」という集まりがつくられていた。これを母体として、1917（大正6）年に「関西建築協会」が発足した。片岡安、波江梯夫ら5人が創立委員となり、大正6年3月30日に創立総会が行われた。事務所は片岡建築事務所におき、『関西建築協会雑誌』を発刊して、建築家の社会的役割と責任を自覚し、関西を中心に講演会などによる啓蒙活動や、委員会単位の調査研究活動がなされた。1919（大正8）年に「日本建築協会」と改称し、会誌も『日本建築協会雑誌』と改題された。さらに1920（大正9）年には、その会誌を『建築と社会』と改題し、名実ともに、関西において建築を通じて社会啓蒙する精神のもとに活動した。会員数は1917（大正6）年末に74名、その数年後には1000人を突破した。

3. 様式の上にあれ

『日本建築協会雑誌』1919（大正8）年5月号から8月号に掲載された「様式の上にあれ」と題する文章の中で、建築家・村野藤吾は「様式の上にあれ！ 様式に関する一切の因襲から超然たれ！」とし、自らを「厳格なるプレゼンチスト」と位置付け、「現在に生の享樂を実感する現在主義者われらに、過去と未来の建築様式を与えんとすることは不必要である、むしろ罪惡である」として、日本の伝統的なものであれ、西洋的なものであれ、様式というものにとらわれない、その時代の

「道徳性」に則した新しい「日本的建築」のスタイルを求めべきであるとしている。ただし、「いうところの日本的建築がどんなものであるかは私にも不明である」とした上で、「それはおそらく今日以後発展する、経済と、交通と、科学と、芸術とにたいするわが建築家の正当なる研鑽と忠実なる究明と、しこうしてよって得べき批判能力の自由なる創作のみが決しうる問題であろう」としており、この時点では新しい日本の建築様式として確たるものがあつたわけではなかった。

4. 新住家を造る私の方針

『建築と社会』1922（大正11）年2月号の「新住家を造る私の方針」は、西村伊作の住居観を述べたもので、当時の住宅を取り巻く状況がよく描かれている。西村伊作は文化学院を創立した教育者であり、新宮の自邸や文化学院校舎の設計など、建築家・芸術家としての一面も持っていた。

西村は「建築の根本は家であり、人間の住む住家であると思ひます」とし、「藝術は人間の生活が基になつて出来るので、學問、技術等、何でも生活の完成のために役立つものでなければ何の價値もないのだと思ひます。その人間の生活を最も人間らしく置くところは住家です」と述べている。しかし、当時は「日本人の生活の方式が定まつて居なく、過渡の混雜をもつて居り、新を好む人と、舊に愛着する人とが交つて居るし、世界的の心と内國的思想とが對立して居るから、生活が非常に複雑で、従つて住家の形式も中々容易に一定しません」という状況であるとしている。さらに、「新らしい、西洋風の住家も、日本に於ける様式は實に複雑に混じて居て、奇妙不思議の「西洋」が多く、世界中で一番不思議な、建築の百鬼夜行と云ふ有様でせう」とし、「自由、と云ふよりは無秩序、無形式に過ぎると思ひます」としている。

ここには、大正時代の日本の住宅が伝統的な形式を踏襲しているものが多数を占めるのと同時に、明治以降に入ってきた欧米の生活様式と住宅形式の影響を受け、様々なスタイルの住宅が建てられていたことが描かれている。しかも、それらの新しい生活様式や住宅形式は、日本人の生活に馴染むところまではいっていなかったことがわかる。そのような状況の中で西村は、「しかし早、追々、我々日本人の新らしい住家の形式が出来てもよいと思ひます」と述べ、その当時に日本人の新しい生活様式と、それに対応した新しい住宅形式が求められていたことを物語っている。

5. 家族を含む自画像

1925（大正14）年2月号の「家族を含む自画像」は本野精吾が自邸について解説した文章である。本野は武田五一の紹介で京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）の教授を務め、数は少ないが建築設計を行った。その後、日本インターナショナル建築会の設立（1927）に参加している。

この文章の中で本野は「建てて人に示さうとする心持は勿論少しも這入つて居ません。又何か物珍らしい事をして、ソレを世に問はうと云つた風な心持も少しもありません」と述べつつも、「可なり思ひ切つた試みをやつて見ました」としている。本野は自邸において、欧米の合理性を取り入れつつ、日本人のための新しい時代に則した住宅を探るための実験を試みたのである。

本野は、まず家族生活の基調について解説している。「家を計畫する場合には先づ家族生活の基

調が何んなものであるかを極めなければ、計畫の最初の一步を踏み出す事さへ出来ません」とし、日本の伝統的な住宅の封建的身分制度を反映した接客中心の間取りでもなく、欧米住宅の直輸入にみられる日本人の生活にはそぐわない間取りでもなく、その時代の日本人の生活に適合した住宅を求める姿勢がうかがえる。

さらに本野は2つのポイントに着目してプランニングの問題に言及している。ひとつは「内部の家族生活自身の運轉」、もうひとつは「それと外界との接觸點の解決」として、「住宅の生命もソノ藝術的價値の基本もあらゆる主要なる分子は總てココから出發すると云う考へ」であるとしている。

このことについて、本野はさらに詳しく考察し、「動線」と「靜點」という言葉を用いて説明している。これらの言葉は本野が「私が勝手に用ひて居る言葉」であると前置きし、動線とは「人々が家の内を動き廻る場合を考へて其の軌跡」を指し、靜點とは「動線を避けて人々が靜かに落ち付く多くの點」であるとしている。その上で、動線の「形がリズムミカルであり純一なシステムの中に溶かし込まれて居る事が最も肝要」とし、「住宅の動線は最も有機的に構成される事が必要であり、茲に住宅の有機性が胚胎されるのであります」と述べている。この考え方は、まさに現代の建築計画でいう動線と同じ概念であり、伝統的な因襲によらず、欧米の新奇な形式にもよらない、実際にそこで生活する人の行動こそが住宅のプランニングを決定する重要な要因であるという考え方を示している。

次に部屋の配置については、「動線の構成が最も有機的になった時部屋は適當に案配された事を示す」とし、あらかじめ各部屋の方位について充分に考慮しておけば、生活の行動をきちんと整理するだけで、各部屋の配置は自ずから定まってくるとしている。

本野自邸で具体的に見てみると、居間・客間・食堂等を南東に、台所・勝手・浴室・便所等を北西に集めておいて、「其の中央部に階段を置いてソレと住宅の發動機



図-1. 本野精吾自邸 スケッチ

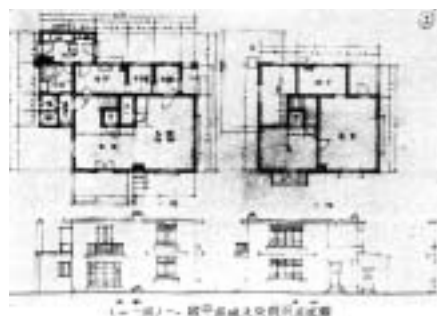


図-2. 本野精吾自邸 平面図及び立面図



図-3. 本野精吾自邸 配置図及び立面図

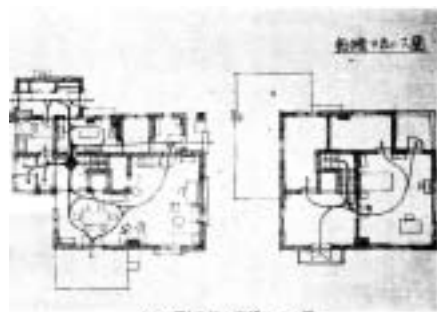


図-4. 本野精吾自邸 動線図

能の中心点即ち臺所方面と密接の關係を保たしめ」ることにより、「階段の上り口の邊は動線が最も集中する点即ち人間の脈管に比較すれば大動脈に當る部分」になるとし、平面に動線を記入した図（図－4）を用いて説明している。

本野はさらに考察をすすめ、「必要の表現」として「必要即ち動線の構成や室の案配と表現との關係」について特に重きを置いたとしている。「私の家に就て一貫して流れて居る事は表現は必要の自然の發露を基礎とする」ことであるとし、日本あるいは欧米の伝統的様式や機能的、合理的理由のない装飾を一切排除することを意図していることがわかる。この「必要物件の自然的表現」は、来るべき建築様式に対する本野の考えを含んでおり、本野は過去に存在した繁雑にして不合理な建築様式からの解放を試みたと説明している。

そして新しい日本人の生活は、「とち定められた欧州人の生活でもなく又きらびやかな米國人の生活でもありません」とし、「やはり美しき日本の天然から生まれる生活」に愛着を感じつつ、人として人類に共通なものと人種として各自に特殊なものの「其の共通性と特殊性とが二つながら相混つて全體を形成する」としている。

さらに、本野はフランク・ロイド・ライトの有機的な空間構成や、ル・コルビュジェの現代を基礎にした独創的な空間構成に新しい建築の参考になるものがあるとしている。

6. 庭園は住宅の延長

1927（昭和2）年10月号の「庭園は住宅の延長―舊日本型から新日本型住宅へ―」は、本間乙彦による新しい日本の住宅への提案である。この中で本間は、19世紀後半からの短期間における文化の進展が日本に「一時に流れ込んだ明治時代以降の混亂状態は格別であり」、日本の都市は「世界各國の建築様式が展覽會場」のように展開しているとしている。住宅建築においても日本の建築家は世界の新しい形式を取り入れるのに勇敢であるが、多くの場合それは「皮相的即外面的の形式の問題のみに拘泥して内容が等閑に附せられ



図－5. 本野精吾自邸 外観写真



図－6. 本野精吾自邸 内部写真

※図－1～4 『建築と社会』1925年2月号

図－5～6 『建築と社会』1925年6月号



図－7. 機能主義前衛住宅

てはゐなかつたか」と指摘している。そして、住宅とは生活の容器であり、その生活様式は手軽には変えることができない以上、いかに新しいタイプの住宅であっても、内面的には古い日本型の要素を残存しなければならない矛盾に陥っていると指摘している。本間は「住宅の本質は内面的に考へられるもので外観は第二次的のものと思ひます」とし、「わが國將來の住宅の形式としては舊日本型から芽ばえた新日本型以外にあり得ない」としている。

本間は旧日本型住宅の特徴は、「外氣に對して殆ど開放的な建築で、時には庭と住宅との區切りを撤して庭を住宅の延長として見た」ところにあるとしている。それに対して、当時日本に移入された住宅は北欧型が多く、旧日本型と全く反対の四角の窓から庭を眺めるだけのものが多いとし、これに対して当時のフランスやドイツの一部に新しい住宅形式が現れつつあるとして、「見方によれば舊日本型の特徴を巧みに取り入れた新らしい形式が生まれつつあります」と指摘している。そしてこれらの傾向は慧眼なる外国人建築家が旧日本型建築にヒントを得たのではないかと推測している。(図7～10)

そして、「美はしい傳統をもち、住宅と庭園の關係に洗精された形式をもつ舊日本型住宅を母胎として、新日本型住宅の創成される日を待つものであります」としめくくっている。

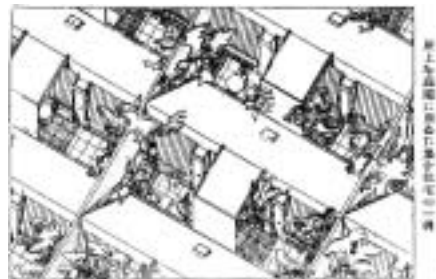


図-8. 屋上を庭園に用いた集合住宅



図-9. オープンポーチを持つアパートメント



図-10. オープンポーチを持つアパートメント

※図-7～10 『建築と社会』1927年10月号

7. 懸賞論文「将来の日本の住居」

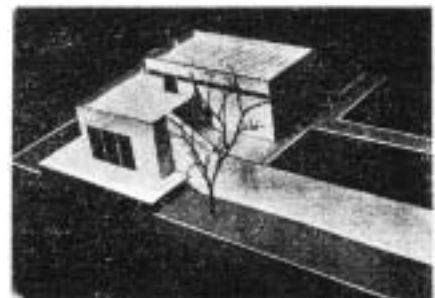
1928(昭和3)年2月号の「懸賞論文『将来の日本の住居』」は、当時の社会の進歩や都市計画の実施等に伴って、住宅問題が一般社会から漸く論議され、研究されてきたのを受けて、日本建築協会が『将来の日本の住居』と題して賞金をかけて論文を募ったものである。

第1等の加藤善吉の論文は、都市的視点から住宅問題を捉えたもので、住宅の都市集中を避け、地方分散による問題解決を模索したものである。

第2等の岸田不元の論文は、将来の住宅問題そのものを論じている。岸田は「現在日本に行はれてゐる住宅建築は、内容外観共に、其の形式上非常に雑然としたものである」とし、「一貫した目的理想の如きは、全然ないかの如くにさへ思はれる」と問題提起している。それは当時の日本の住宅が、日本風住宅、欧米風住宅、折衷風住宅の3つに大別でき、「それら相互の調和、關係の如きは少しも考へられずに、唯雑然と無反省に相平行して行はれてゐるのが、現在日本に於ける住宅建

築の実状である」とし、これに対して日本の住宅建築の進むべき確固とした理想と規準が樹立されるべきであるとしている。そのために「住宅建築を支配する根本の要素は、人と自然である」とし、「眞に創成された新日本の文化、新日本の生活様式が確立されるのでなければ、眞に生命ある住居の建築は日本には生まれない」と考えている。それは「在來日本の因襲的生活でもなく、また欧米そのままを模した異邦の生活様式でもなく、日本建築旧来の良い点を保有しつつ、徒に西洋の模倣に偏ることなく、しかも新構造法や新設備を持つ日本人の生活にあった住宅が必要であると説いている。具体的な例としては、開放的であること、大きな窓、深い軒の出、打ち開いた縁側やヴェランダなどを挙げ、「日本人の住まふ家といふことを基礎とし、断えず念頭に置いて、其の上に純科學的の討究の結果善しとして建てられる住宅建築こそ、吾々の求めて止まぬ眞正の日本の住宅建築である」としている。ただし、この論文に挙げられている具体的な例では新しい日本の住宅形式としては不足であり、審査員もこれだけでは実際の解決は頗る困難だと考えており、新しい日本の住宅像はここでもまだ見えていない。

この記事で興味を引くのは、記事の内容もさることながら、記事のページ脚部に「外国新住宅グラフ」として論文の内容と関係なく、欧米の住宅の紹介記事を載せていることである。どういう編集方針であったのかは不明であるが、そこにはウィーンのヨーゼフ・ホフマンの住宅など、当時の欧米での新しい住宅建築の形式が写真と図面で紹介されている。(図-11)



ヨーゼフ・ホフマン設計作
ラタキ村に於ける田園小住宅の一例(模型)

図-11 外国新住宅グラフ
『建築と社会』1928年2月号

8. 藤井厚二の住宅

藤井厚二は、1888(明治21)年に広島県福山市の酒造家の次男として生まれ、1913(大正2)年に東京帝国大学建築学科を卒業。竹中工務店を経て、1920(大正9)年、武田五一に請われ、創設されたばかりの京都帝国大学建築学科で教鞭を取るようになった。

藤井は1920(大正9)年に京都大山崎の天王山麓に約1万坪の土地を購入し、そこで1927(昭和2)年までに4回の自邸の建て替えを行い、それ以前に神戸の石屋川に建てた1軒を含めると、合計5回の実験住宅の建設を試みている。特にこの第5回実験住宅は「聴竹居」と呼ばれ、大山崎の地に現存している。

藤井の住宅は環境工学がその理論の支えになっており、日本に固有の環境に調和し、新しい日本の生活スタイルに適応した眞の日本文化住宅の創成を目指していた。藤井は、それらの理論が机上の空論に終わらぬように、自邸の建て替えで実験を繰り返した。これらの住宅論は



図-12 京都市・某氏邸 外観写真
設計：藤井厚二

1928（昭和3）年の『日本の住宅』、1929（昭和4）年の『聴竹居図案集』にまとめられている。

藤井の住宅は、環境工学的視点から和風、洋風それぞれの構造、間取り、壁、窓などの各ディテールを日本の風土や新しい日本の生活スタイルにふさわしいものとして検討し、具体化していった。その過程で、藤井は多くの部分で和風のものを選択し、結果的には日本の伝統的な住宅を科学的な見地から再評価を行い、日本の旧来の住宅に現代性を持ち込もうとした。

雑誌『建築と社会』には、この藤井の住宅に関する考え方を示した文章は少ないが、「聴竹居」以降の藤井の設計による住宅が多く掲載されている。それらはこの時代に求められた新しい日本型住宅への藤井の回答であると思われることができる。（図-12～13）

9. 不燃質小住宅の新構造法

1932（昭和7）年6月号の「不燃質小住宅の新構造法」は岡田孝男による欧米の新しい小住宅の構造法の紹介記事である。岡田孝男は京都大学工学部建築学科で武田五一の教えを受け、大阪三越住宅建設部などを経て、のちに帝塚山学院大学教授。武者小路千家に入門し、「相伝」を受けている。

『建築と社会』では、1929（昭和4）年2月号以降、「外国新建築紹介」として欧米のモダニズム建築紹介記事を掲載しており、岡田の記事は、日本における耐震耐火耐久的な小住宅の構法として、鉄筋コンクリート造以外により簡便で適当なものがないか考察したものである。岡田は特に当時ドイツやフランスなどで盛んに行われていたジードルングと呼ばれる、公営あるいは組合経営の多数の小住宅群に着目し、グロピウスやコルビュジエなどの小住宅の構法を解説し、さらにそれらを日本に導入できるかどうかの検討を行っている。（図-14～15）

結論としては、まだいろいろな面で研究の必要はあるものの、日本でもこれらの構法が有効であろうとしている。新しい住宅の形式を、その目新しさやデザイン性で



図-13 京都市・某氏邸 平面図
設計：藤井厚二

※図-12～13 『建築と社会』1930年5月号



図-14 ジードルングの小住宅 図面
設計：ル・コルビュジエ

のみ見るのではなく、技術面を伝えようという記事が出てきたことには、当時としては意味があるといえよう。

10. 小住宅プランの研究

1933（昭和8）年4月号及び6月号の「小住宅プランの研究」は、前章と同じ岡田孝男による小住宅懸賞設計競技優秀案のプランに対する考察である。

ここで岡田は、1931（昭和6）年から1933（昭和8）年にかけて行われた6回の小住宅懸賞設計競技の優秀案40案を選び、それらを通覧することにより、当時の関西建築界における小住宅への考え方を示そうとした。

最初に敷地と道路の位置関係に着目し、それにより玄関位置が決まり、その玄関位置により住宅各室の配置が決まるとしている。さらに、各室を居間・茶の間・寝室・子供室・サンルーム・応接室などの「居室部」、便所・化粧室・浴室・台所・女中室などの「作業室部」、玄関・広間・廊下・階段などの「通路室部」の3つに分け、それぞれの相互関係について検討している。居室部と作業室部の間に通路室部があるものを最も便利なプランとし、通路室部で作業室部を中断せるものは、はなはだ便利が悪いとしている。（図-16）

次に岡田は、小住宅の室の数と大きさについて一覧表をつくり、各室の広さの平均を取って標準を出し、住居係数（居室部／建築延坪）、有用係数（居室部・作業室部の和／建築延坪）、価値係数（住居係数＋有用係数）などを算出して、プランの広さの割合の優劣を客観的に判断することを試みている。

さらに小住宅プランの優劣を客観的に比較する方法として、「種々の条件を始めに規定しこれに合格するか否かによって定める」方法を提案している。あらゆる場合を考慮して数多くの条件を規定しておけば、審査員の主観による神秘的総合的判断に比べてより合理的であり、客観的条件による科学的分析的判断となるとしている。岡田が試みた例では、住宅の条件を衛生的条件・構造的條件・経済的條件・使用的條件・迷信的條件・美的條件

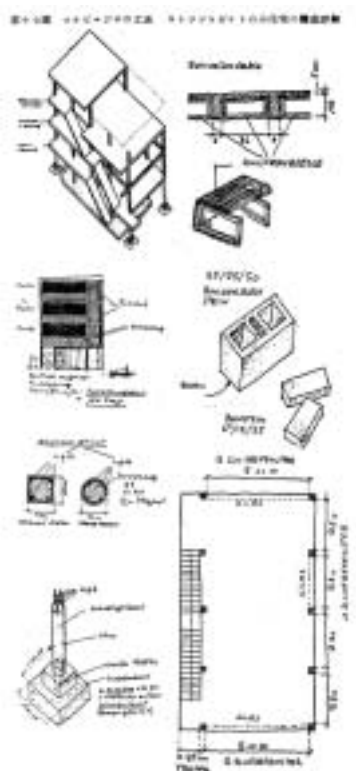


図-15 ジードルングの小住宅 構法設計：ル・コルビュジェ

※図-14～15 『建築と社会』1932年6月号

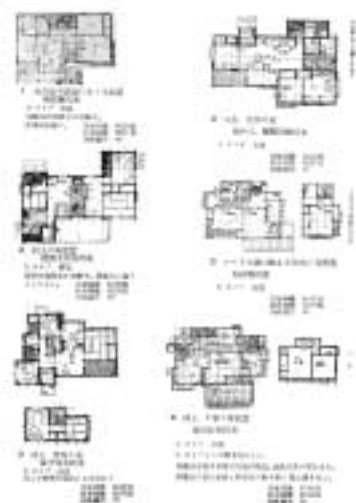


図-16 小住宅プランの研究

の6つに大別し、さらにこれらを詳細に分けてプランの価値を分析的に調べ、最後にこれを合計して総合的価値を定めている。(図-17)

	章 節 目	住宅の価値										住宅の価値										合 計	百 分 比	必 要 度			
		基本設備					生活設備					環境設備					その他										
		一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五	一	二	三	四	五						
本文引用番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24		
衛生的価値	暖房設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	水道設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	排水設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	浴室設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗面設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	トイレ設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	冷蔵庫設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
経済的価値	暖房設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	水道設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	排水設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	浴室設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗面設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	トイレ設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	冷蔵庫設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
使用価値	暖房設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	水道設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	排水設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	浴室設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗面設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	トイレ設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	冷蔵庫設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
総合的価値	暖房設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	水道設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	排水設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	浴室設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗面設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	トイレ設備の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	冷蔵庫設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
	洗濯機設置の有無	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+			
合 計		45	39	43	40	48	58	48	55	55	43	52	46	48	47	53	56	50	58	47	46	47	48	43			
総 計		1	4	2	3	4	1	5	2	3	6	1	4	2	3	4	2	3	4	1	4	2	3	1			

図-17 小住宅プランの研究

※図-16~17 『建築と社会』1933年4月号

ただし、岡田自身も指摘しているように、この方法には、どういう条件を取るか、条件の間に価値の軽重をつけるかなどいくつかの難点があるが、この時代において住宅というものを科学的・分

析的に研究すること、新しい時代への進歩の可能性をみていたことは重要である。

11. 欧米住宅建築界の新傾向

1934（昭和9）年3月号の「欧米住宅建築界の新傾向」は、岡田孝男による外国の建築雑誌に掲載された住宅の新しい傾向の紹介記事である。

取り上げられているのは、1933（昭和8）年の1年間に欧米の雑誌に掲載された住宅のうち、特に「将来の住宅」「明日の住宅」などと題した展覧会や博覧会を中心とした新しい住宅であり、その傾向と共通の目的がどういうものであるかを探っている。

ニューヨークの百貨店が主催した「将来の住宅」に出展された住宅で岡田が注目しているのは、「ポーチ及テレスの重要性」である。快適な戸外生活の強調であり、ポーチ及びテレスが住宅の中でも最も重要な位置に配置され、豊富な日光と新鮮な空気の満喫を目指していることが重要であるとしている。さらに、アメリカのより新しい傾向のものとして、ロサンゼルスに建てられたリチャード・ノイトラ設計の住宅を紹介している。（図-18）

次にミラノで行われた博覧会に出品された住宅を紹介している。博覧会用に提案の傾向が強い住宅であるが、イタリア住宅界の新しい傾向を示しており、ここでも「ポーチ、テレスが重用されて、住宅は庭園と相交錯の関係にあり、庭は家の内まで侵入し、家は庭の外まで延長して居る」のが新しい住宅の著しい傾向であるとしている。

さらにオランダのジードルングや、フランスのル・コルビュジェ設計のサヴォア邸（図-19）やピエール・シャロー設計のガラスの家、その他ヨーロッパ諸国の事例を挙げ、戸外生活の快適性の享受や健康的な住宅という傾向があることを指摘している。

最後に1933年のシカゴ博覧会に出品された住宅を取り上げ、部材の工場生産や組立方式など住宅の工業化と、新しい住宅設備の導入に関する点に注目している。



図-18 ロサンゼルス住宅



設計：リチャード・ノイトラ

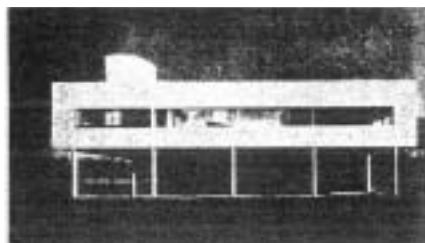


図-19 ヴィラ・サヴォワ

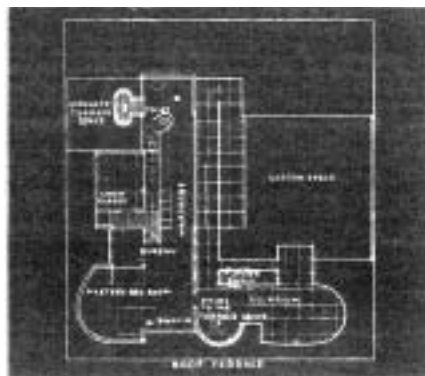


図-20 ヴィラ・サヴォワ

岡田はこれらの住宅を特殊な事例であるとし、その当時において欧米でも一般大衆の家は依然として旧来の伝統様式によるものであるとしつつも、大衆の住まい方が変わることにより、この新しい住宅の形式、つまり住宅の工業化、機械設備の導入、住宅と庭園の交錯などが、一般の形式として広まっていく可能性を指摘している。

さらに、これらの形式が日本に導入できるかどうかは、さらなる研究が必要としているが、ポーチやテラスにみられる自然の恩恵を充分に享受する形式は、日本の住宅においては古来よりその真価を発揮していたとし、むしろ旧来の日本住宅の弱点であった自然界の暴威に対する対策の改良を行うことが必要であるとしている。

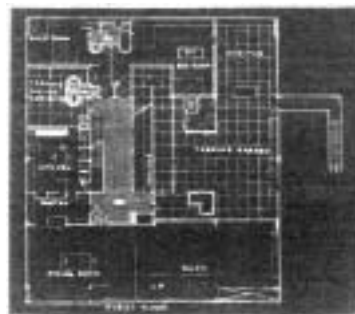
12. 乾構造小住居試作

1936（昭和11）年3月号の「乾構造小住居試作」は本野精吾が長男の結婚を機に、二人の差し当りの住居のために自邸の敷地の一角に建てた小住宅の解説である。

この住宅は、当時の「日本に於ける小住居の単位として、社会に活動を始める新婚家庭の容器として考へて見た」とし、その基本方針として、以下のものを挙げている。

- ・子供一人までの若いサラリーマンを目標とし、小規模な仕事にも従事できる一般普遍性のある住居とする。
- ・生活を単純簡易に運転し得るためと建設費を低減するために容積をできるだけ小さくする。
- ・乾式構造を用いて将来への研究資料として役立たせる。そのために、手近に得られる普通市場品を用いる。
- ・必要と充分の原理に基づく。
- ・台所と食卓以外の造付家具は少量にし、家具類を持ち込んで、様々な色調の生活内容を可能にする。

結果、居間上部に2.5坪の吹抜を持った延床約13坪の小住宅となり、自邸に続いて、ここでも本野は日本の新しい生活様式に対する新しい住宅形式の提案を、その構法を含めて行っている。（図-20）



第19号 住宅に機軸を以て



第20号 住宅に機軸を以て

図-19 サヴォワ邸 ル・コルビュジェ
※図-18~19 『建築と社会』1934年3月号

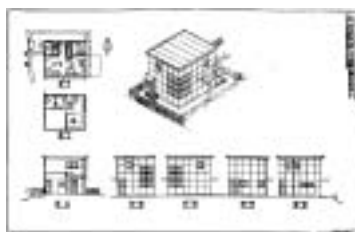


図-20 乾式小住居 設計：本野精吾
『建築と社会』1936年11月号

13. 住居の基本空間に対する一考察

1941（昭和16）年4月号の「住居の基本空間に対する一考察」は、西山卯三による小住宅の空間構成の検討とその最低限条件及び建設の基準、さらに将来の改善の方向を示したものである。

この中で西山は、合理的な標準住宅の条件を考察し、特に寝室と食室において使用人員数に対する適正な室の広さの検討（図-21～22）を行った。さらに衛生面から食室と寝室の兼用を避ける「食・寝室の分離」を提唱し、「食事と團樂の結合を發展開花させる事により、食室を居間へと飛躍」させ、「日本的粗悪居住の本質をなす居・寝結合の止揚への起點とせねばならぬ」としている。

また、空間の独立性や最低限所要住居面積等の検討を行い、建設の規準として大量建設における「型の採用」が重要であるとし、「各型についての各居住者構成に対する「住ひ方」が確立され完備された住宅經營機構を通じてその実施が監視されねばならぬ」としている。さらに、間の標準化とその用途の規定、寸法的研究、着座方式等の検討を行っている。（図-23）

ここで西山が主張していることは、「國民住居の探求は、まづ單に量的擴りとして從來把握されてゐた住居面の認識に対する曖昧性を拂拭する」ことにあり、「その認識の曖昧性の故に建築學其物が曖昧化されてはならない」とし、「建築が生物學的問題ではなく文化的問題である事を明にしなければならぬ」としている。そのためにもまず、「食・寝分離」を新しい住居と生活の中に再確立し、發展せしめることが重要であるとしている。

14. 菖蒲池厚生住宅展覧会・小住宅懸賞設計競技

1941（昭和16）年10月号の「菖蒲池・厚生住宅展覧会・小住宅懸賞設計競技・入賞佳作圖案」は、日本建築協会の創立25年記念で行われた設計競技の入賞佳作の図面集である。入賞したものは実際に案の通りに建設された。

入賞案の一つ、大木千鶴子案は、南側に玄関を取り、中央に台所・浴室・便所などの作業部を取り、家族で使

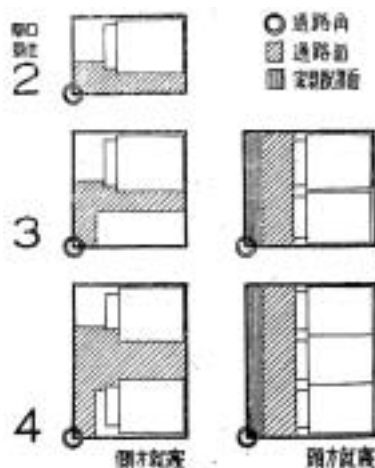


図-21 寝室の検討 西山卯三

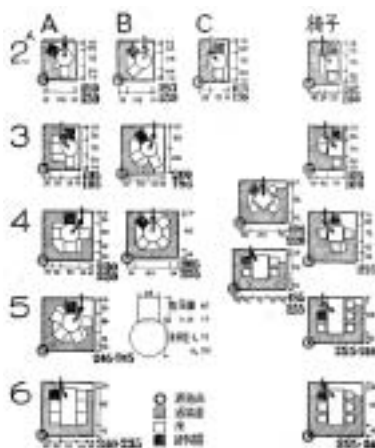


図-22 食室の検討 西山卯三

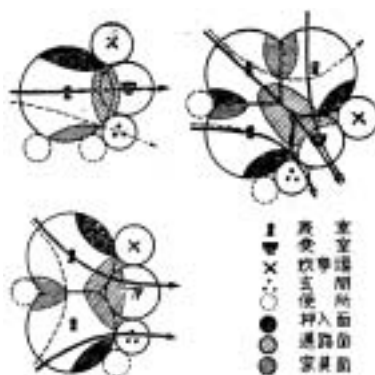


図-23 各室の組織図 西山卯三

※図-21～23 『建築と社会』1941年4月号

う「公」の空間と個人で使う「私」の空間を東西に明確に分けている。「公」の空間は西洋の椅子式生活とし、「私」の空間は日本伝統の畳の床式生活としている。

この設計競技の批評座談会では、この大木案の評価が高い。その内容を見てみると、評価されている点は、

- ・南に玄関を持っていったこと。
- ・洋式の部分と畳の部分を玄関広間の左右に分けている。
- ・家族の寝室と昼間使う部分を分けている。
- ・作業部を中央北側にまとめて取っている。
- ・生活の様式までコンパクトに考えている。
- ・採光。
- ・広いヴェランダを戸外の居室ととらえている。

などが挙げられている。(図-24)

ここに見られるのは、戦前のこの時代の新しい日本の生活様式に対するひとつの提案である。

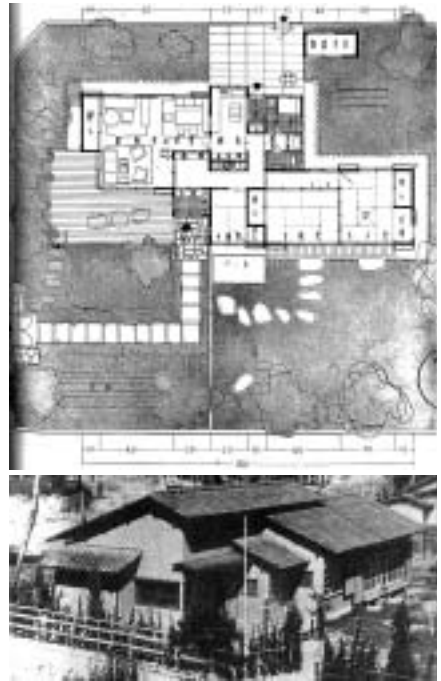


図-24 小住宅設計競技 大木千鶴子案
『建築と社会』1941年10月号
写真は1943年5月号

15. おわりに

この稿では、大正後半から昭和初期の第二次世界大戦前までに、雑誌『建築と社会』に掲載された記事をいく

つかみることにより、戦前の関西での住宅設計を取り巻く状況が、いくらかでも明らかになるのではないかと考察を進めてきた。

日本では明治以降に日本人の生活様式及び住宅形式にも欧米からの影響が多く入ってきた。それにより、明治から大正期の日本の住宅形式は様々なものが入り交じることになる。日本の伝統的な形式、欧米から入ってきた形式、それらの折衷という形式も生まれた。特に欧米から入ってきた形式には様々な地域のものがあり、まさに住宅博覧会のごとき様相を呈していた。しかも、どの形式をとってみても、当時の日本人の新しい生活を受け止めるのには不足している部分があった。

日本の伝統的な形式を受け継いだものは、好みとしては日本人に最も合っているが、古い因襲をも受け継ぐため、封建的な身分制度から抜け出した新しい日本人の生活にはそぐわない部分があった。さらに構造や衛生上、また生活の合理性ということに関しては明らかに劣っていた。

欧米から入ってきた形式は、耐震性や衛生面をみても科学的な根拠があり、生活の合理性も日本の伝統的な形式に比べて勝っていた。しかし、あまりに欧米からの直接の移入であったため、そのままでは日本人の生活にはやはり馴染まなかった。

結局、日常的な生活は日本の伝統的な様式を踏襲し、来客時の応接などに新しい欧米から入ってきた洋館や洋室をあてるといった形式が増えることになった。折衷様式というよりも、単に無造作に並べただけであり、結果日本人は日本風と欧米風の二重生活を余儀なくされた。

大正時代になると、これらを見直すべきだとする意見が出てくる。新しい時代にふさわしい日本人の新しい生活様式の確立と、それに適した新しい日本の住宅形式を求める意見である。

この新しい住宅形式の手がかりとして雑誌『建築と社会』の記事にみられる傾向としては、

- ・欧米から入ってくる形式を安易に取り入れず、日本の伝統的な形式の良さを見直す。
- ・欧米の形式の表層的な採用ではなく、耐震性や健康、衛生面の良さ、生活の合理性を取入れる。

という方向であったことがわかる。

そして、着目点として挙げられているのが、「自然との融和」と「科学的検証」であった。庭との一体感や戸外生活の心地良さ、あるいは日本の四季に対応した「自然との融和」こそが、日本の伝統的な形式の最大の良さであるとし、一方住宅の居住面の曖昧性を払拭し、構造の安全性や住宅の衛生面、各室の広さや構成、さらに通風や採光などの環境面などに科学的根拠を与え、住宅形式に合理性を与えることにより、新しい日本人の生活に適った新しい住宅が見えてくるとしている。

さらに、グロピウス、コルビュジェなど、欧米の新しい傾向の建築、いわゆるモダニズム建築に新しい日本の住宅を考えるヒントがあるとし、誌上で盛んにその紹介記事を取り上げているのも当時の特徴のひとつである。

戦前の関西での住宅設計を取り巻く状況は、海外の新しい住宅形式を参考にしながら、日本の伝統的な住宅形式を見直し、明治以降の混乱からの脱出と新しい日本の住宅形式を模索していた時期であったといえる。

この時期の阪神間におけるモダニズム住宅としては、1924（大正13）年のフランク・ロイド・ライト設計の山邑邸、1931（昭和6）年の安井武雄自邸、1934（昭和9）年の村野藤吾設計による中山悦治邸が挙げられる。

安井武雄自邸は西宮市雲井町に建てられ、安井武雄の設計スタイルがこの自邸において機能主義的モダニズムデザインへと一転したことにより重要な建物である。ピロティやコーナー窓の採用、白い壁面と垂直・水平線による構成などの抽象的形態、室内に用いられたパイプ椅子などに特徴がある。現存していない。（図-25）

中山悦治邸は芦屋市山芦屋町に建てられた。村野藤吾は1931（昭和6）年の森五ビルや大阪パンションなどですでにモダニズムデザインを試みており、この中山悦治邸においてもその構成にモダニズムの手法が用いられている。ただし、材料の使い方や細部のデザインには装飾的な部分も見られ、その自由な設計態度に村野藤吾らしいモダニズムの捉え方が伺える。（図-26）



図-25 安井武雄自邸
※『安井武雄作品譜』城南書院1940年7月



図-26 中山邸 設計：村野藤吾
『建築と社会』1934年5月号